

日本体育学会第 68 回大会（静岡大学） 大会本部企画シンポジウム①

開催日時：2017 年 9 月 8 日（金）15:30-17:30（予定）

会場：コンベンションアーツセンター「グランシップ」（1,200 人ホール又は 500 人ホール）

テーマ：ポスト 2020 年の学校体育の未来を考える：国際協力・開発支援の今後から

企画：学習指導要領検討特別委員会

趣旨：

スポーツ庁が発足し、すでに 1 年が立ちました。この段階で、すでに、2020 年東京オリンピック以降のビジョン作りがスタートしています。スポーツ庁が発足した中で、日本が海外に発信していけるシステムは何かを改めて明確にし、それを核にした海外への発信をしていく必要があるのではないのでしょうか。その際、日本のアスリートたちのフェアプレイ精神の高さが、学校体育中心のスポーツの発展によるスポーツへの教育的要素の強調にあるといわれるように、日本の学校体育のシステムとしての独自性や卓越性を改めて明確にする必要があると思われまます。

第 2 次世界大戦後の 1947（昭和 22）年に「教育基本法」が公布されて以降、運動場や体育館、水泳プールの体育施設の充実を前提に、必修教科の「保健体育科」（小学校は「体育科」）授業、行事としての「運動会」、学校教育活動としての「運動部活動」等の学校体育が国民の幸福な生活のために果たしてきた成果は大きなものがあります。しかしながら、「知識基盤社会」という掛け声のもと、「読解力、数学的リテラシー、科学的リテラシー」からなる OECD の PISA（Programme for International Student Assessment）と呼ばれる国際的な学習到達度調査が大きな影響を与え、高度な認知能力の育成が重視される傾向が強まる中、社会が学校教育に求める役割が変化し、学校体育の必要性が国内外で必ずしも十分支持されていない状況が生まれているのではないのでしょうか。そこで、再度諸外国との比較を踏まえユニークな独自性を中心に、日本の学校体育が国民の幸福な生活のために果たすべき役割を明確にする必要があると考えます。

サブテーマ（案）：

1. スポーツを通じた開発支援をめぐる国際的な取組：ユネスコの良質の体育実現に向けて
2. ユネスコの良質の体育実現に向けた日本の貢献
3. ポスト 2020 に向けた取組

日本体育学会第 68 回大会（静岡大学） 大会本部企画シンポジウム②

開催日時：2017 年 9 月 8 日（金）15:30-17:30（予定）

会場：コンベンションアーツセンター「グランシップ」（1,200 人ホール又は 500 人ホール）

テーマ：スポーツ指導者の資質向上と質保証ならびに資格のあり方

ーコーチング・イノベーションの推進へ向けてー

企画：指導者育成資格特別委員会

趣旨：

2013 年以降、スポーツコーチングの現場で顕在化した体罰・暴力問題をはじめとする諸問題に対応すべく、グッドコーチ育成の機運が高まった。日本体育協会が受託した「コーチング・イノベーション推進事業」において、コーチ育成のための「モデル・コア・カリキュラム」が作成され、それに基づいて、大学教育での授業展開も始まったところである。カリキュラム作成・授業展開に続いて課題となってくるのは、カリキュラム修了者に対する資格の付与に関わってコーチの資質を測定しそれを保証する仕組みづくりである。日本体育協会においても、この点は課題として認識されているところである。

そこで、本学会に設置されている指導者育成・資格検討特別委員会では、このような動きとの連携を視野に入れつつ、コーチを中心にスポーツ推進に関わる人材の質保証を担う制度の設計に向け、考えておくべき諸課題を多角的な見地から見定めようとしている。グッドコーチに求められる資質とはどのようなものかを知り、それをいかに測るのか。また、それに基づいて資質を保証する仕組みをいかに構築していくべきか。このような問いに迫ってみたい。

本シンポジウムでは、日本に相応しい仕組みを模索するために、海外事例を参照しつつ、こうした一連の取り組みの意義と課題を共有することを目指す。また、それらに対し、本学会や大学等関係諸機関がどのように協働することが可能なのかを探ることも併せ、本シンポジウムを提案する次第である。

サブテーマ（案）：

- ・コーチング・イノベーション推進事業
- ・日本体育協会におけるカリキュラム変更と資格付与
- ・コーチングエクセレンスの世界的動向
- ・体育系大学での取り組み
- ・ヨーロッパにおけるコーチ育成、資格付与の状況
- ・体育学会が目指すべき質保証と資格付与のあり方
- ・人間力とは
- ・資質の測定

日本体育学会第 68 回大会（静岡大学） 大会本部企画シンポジウム③

開催日時：2017 年 9 月 8 日（金）15:30-17:30（予定）

会場：コンベンションアーツセンター「グランシップ」10F

テーマ：若手が担う体育学の未来～温故知新、そして若手ネットワークの構築に向けて～

企画：若手研究者特別委員会

趣旨：

本学会理事会の政策検討・諮問委員会の中に「若手研究者育成」小委員会が平成 26 年に設置されてから 3 年が経過した。その間、体育系の若手研究者をめぐる諸状況と課題をわかりやすく明らかにするため 40 歳未満の正会員約 2000 人を対象に調査を行い、若手研究者の育成・支援の方策について提言するとともに、年次学会において若手研究者交流会を開催し、若手学会員の意見交流を図ってきた。調査結果については、「体育系若手研究者の生活・研究・就職および職場環境に関する現状と課題」としてまとめられている

(http://taiiku-gakkai.or.jp/wp-content/uploads/2015/10/2015.10.6_Wakatekennkyuusya_syoureiinnkai.pdf)。平成 28 年にはこれまでの議論や提言をもとに、若手研究者の組織づくりや研究交流を具体的に推進させるため、若手研究者特別委員会が設置された。本シンポジウム開催はこの委員会活動の一環である。

一方、日本学術会議では、「若手研究者が存分に活躍し、未来の新しい学術・社会を創造する人材が育つためには、彼らの意欲を引き出し、自信を与え、かつ世界に貢献する成果を出せる環境を整える」ことの必要性が認識されている。若手アカデミーの設立（平成 26 年）はその表れといえる。こういった若手研究者を育成・支援しようという追い風の中、体育学の若手研究者は何を考え、どこへ向かっていくべきなのか。

本シンポジウムでは現在の学術界における若手問題の背景、そして体育学の過去そして現在地を踏まえ、体育学の若手研究者の立場から体育学と体育学会の未来を考える。

1) キーノートレクチャー

「日本学術会議若手アカデミー、設置の背景と取り組み」

2) パネルディスカッション

「日本体育学会の歩みから見たこれからの論点と課題」

「人文系研究者から見た体育学の未来」

「理系研究者から見た体育学の未来」

「体育学の学際化と研究者ネットワークの意義・方法」

「若手研究者特別委員会からの提言」